

自称詞「ぼく」と女性キャラクター

——いわゆる「ボクっ娘」の役割語的分析——

富樫純一 (大東文化大学)

浅野総一郎 (大東文化大学大学院)

0. 問題の所在

位相語あるいは役割語の観点では、自称詞「ぼく」や「おれ」が男性属性を示すものであることは周知の事実である。しかし、ポピュラーカルチャー作品（主としてマンガ、ライトノベル）において、女性キャラクターが自称詞「ぼく」を使用する例が少なからず見られ、そのようなキャラクターは「ボクっ娘」「ボク少女」等と俗称されている^{*1}。

自称詞「ぼく」は典型的な男性語であるにもかかわらず、女性キャラクターに使用させることによってどのような表現効果が得られるのであろうか。単純に考えれば、さまざまなところで指摘されているとおり、“ボーイッシュ”“男勝り”な属性を強調するために、あえて男性語である「ぼく」を使用させているのであると捉えられるだろう^{*2}。

ところが、「ボクっ娘」キャラの代表例と言われている、『三つ目がとおる』の和登千代子の言葉づかいには奇妙な点が見受けられる。



- (1) 和登「写楽クンに いったとこなのよ!! 約束を守るのが 男だって!! それなのに…… ボクがやぶる なんて……」

(手塚治虫『三つ目がとおる』第6巻, 手塚治虫漫画全集, 講談社, 1979年6月, p.26)

(1)では、自称詞こそ男性語「ぼく」であるものの、文末表現は「のよ」という典型的

*1 なお、近年の作品に登場する「ボクっ娘」キャラの一覧については、「ニコニコ大百科」(<http://dic.nicovideo.jp/>)、「Wikia Japan」(<http://japan.wikia.com/wiki/>)などに網羅されているので参照されたい。

*2 「ボクっ娘」という用語・概念について説明している web サイトでは、いずれもそのようなキャラクターは“萌え要素”を持つものであるとの補足がある。

な女性語を使用している。このようなねじれた言葉づかいを、男性的な属性の強調という観点から看過することはできないだろう。「ボクっ娘」キャラにおける“ねじれた役割語”がどのような過程で生じたのか考えていく必要がある。

本発表では、このような問題意識を出発点として、次の三点について考察を試みる。

- (2)a. 「ボクっ娘」キャラの発生と波及
- b. “ねじれた役割語”が生まれるメカニズム
- c. 役割語の優先順位についての仮説

1. 先行研究／概念規定

まず、金水(2003)の役割語の定義を見ておこう。

- (3)「ある特定の言葉づかい（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢・性別・職業・階層・時代・容姿・風貌・性格等）を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかに使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができるとき、その言葉づかいを「役割語」と呼ぶ」（p.205）

この定義からすれば、「ボクっ娘」キャラの言葉づかいも役割語と認定することができると思われる。「ボクっ娘」キャラには共通した諸特徴が見られるからである。

- (4)「ボク少女にはボーイッシュな性格付けがしばしばなされる」
(wikipedia「ボク少女」 - <http://ja.wikipedia.org/>)
- (5)「ボーイッシュだったり男勝りのキャラクターはほぼ自動的に「ボク」もしくは「オレ」になるんじゃないか…ってくらい、広く一般化した存在になった」
(同人用語の基礎知識「ボク少女／ボク女／ボクっ娘」 - <http://www.paradisearmy.com/doujin/>)
- (6)「多くはボーイッシュ・中性的なキャラクターがこれに当て嵌まる」
(ニコニコ大百科「ボクっ娘とは」 - <http://dic.nicovideo.jp/>)

また、「ボクっ娘」キャラの言葉づかいを分析した西田(2011b)においても、「少女が「ボク」を使用すると、普通の少女ではなく、スポーツが得意であったり、短髪のボーイ

ツシュな風貌であったりを、想定することが可能」という指摘があり、“ボーイッシュ” “男勝り” といった属性と密接に結びついた言葉づかいであることが分かる*3。

一方で、男性語としての「ぼく」は、もう一つの男性自称詞である「おれ」との対比から、金水(2003:127)では「野性的・攻撃的な「おれ」と柔弱で被保護者的な「ぼく」といった位置付けがなされており、男性語としてみた場合の「ぼく」と女性キャラクターが使用する「ぼく」とでは、与えるイメージがだいぶ異なっている。

自称詞「ぼく」あるいはそれに関わる男性語／女性語については、位相、ジェンダー、役割語など、さまざまな論考がさまざまな観点で扱っているが、詳細は割愛する。

西田(2011b)は「ボクっ娘」キャラの言葉づかいに焦点を当てた唯一の論考であり、実例の分析や概念の規定などにおいて重要な指摘がなされている。が、本発表での問題である“ねじれた役割語”については取り上げていない。

次節以降の分析を明確にするために、ひとつ、概念の規定を行っておきたい。

自称詞「ぼく」を使用する女性キャラクターを、一般的に男性の言葉づかいとなっているものと、“ねじれた役割語”となっているもの、の二種類に区別し、以下のように位置付けることとする。

- (7) 自称詞「ぼく」を使用する女性キャラ全般 : 広義の「ボクっ娘」
 - 言葉づかい全般が男性語の女性キャラ : 「ぼく」使用女性キャラ
 - 言葉づかいがねじれている女性キャラ : 狭義の「ボクっ娘」

本発表では、基本的に「ボクっ娘」キャラを(7)での狭義の「ボクっ娘」に当たるものとして捉え、それ以外の(言葉づかいがねじれていない)キャラを「「ぼく」使用女性キャラ」と呼ぶことにする。

*3 なお、西田(2011b)では、「ボクっ娘」キャラの言葉づかいを「属性表現」(キャラクターの部分的な性格だけを示す表現)と位置付け、役割語とは区別して扱っている。

2. 史的側面からの考察 — 「ボクっ娘」の発生と波及—

2.1. 実際の女性による使用

「ぼく」が一般的な男性自称詞として定着したのは明治期であるが、その当時から女性が「ぼく」を使用する場合があったことは度々指摘されている。(8)は1935年の新聞コラムの引用である。

(8)「さうして此少女の男性化といふ傾向は、女學生などの言葉使ひや生活にも現れて、一流の女學校生徒でもタバコを喫むものがあるし「君」「僕」「何いつてあがるんだい」位は、何耻かしくもなく朝飯前にいつてのける有様だといふ」

（東京朝日新聞1935（昭和10）年4月19日朝刊）

このような傾向は時代が下っても変わらず、寿岳(1979)によれば1970年代の東京でも女子中学生の間で「ぼく」を使用する場合があったということである。また、西田(2011b)も指摘するように、現代においても「ぼく」を使用する女性は少ないながらも存在する。発表者も女子学生が「ぼく」を使用しているのを数度確認している。

ただし、実際の使用においては、流行の域を出ていないと見るべきか。小林(2001)などのいくつかの論考が女性の男性語化を指摘しているが、女性の「ぼく」（あるいは「おれ」）使用が一般化したという段階には至っていない。

実際の女性が「ぼく」あるいは男性語を使用するのは、「仮面」（金水(2003)）、「[臨時的] 発話キャラクター」（定延(2011)）として、ある種“なりきり”的に使用しているのが現状であり、必ずしも自称詞「ぼく」が女性の言葉づかいとして普及・定着しているとは言えないであろう。

2.2. ポピュラーカルチャー作品における「ボクっ娘」

では、ポピュラーカルチャー作品において、(広義の)「ボクっ娘」が発生したのはいつ頃であろうか。女性キャラクターが「ぼく」を使用する最初の例は、手塚治虫『リボンの騎士』の主人公サファイアである。『リボンの騎士』は、雑誌『少女クラブ』（講談社）に1953（昭和28）年1月号から1956（昭和31）年1月号まで連載された*4。

*4 その後、1963（昭和38）年に雑誌『なかよし』（講談社）においてリメイク版が連載されている。アニメなどで一般に知られているストーリーは『なかよし』版のほうである。



- (9) サファイア「いいや…… ぼくは王子で いなければ ならないんだ かまわないで おくれ」
チンク「だめです! だめです! 王子さまは 女の子です!」

(手塚治虫『リボンの騎士 少女クラブ版』第1巻, 手塚治虫漫画全集, 講談社, 1979年10月, p.118)

しかし、サファイアはいわゆる男装キャラであり、表面上は男性属性と結びついたものとして「ぼく」を使用しているため、狭義の「ボクっ娘」ではない。しかし、このキャラクターが以降の「ボクっ娘」キャラに影響を与えていることは確かであろう。

狭義の「ボクっ娘」の最初の例は、手塚治虫『ひまわりさん』に登場する風野日由子（通称ひまわりさん）である。『ひまわりさん』は、雑誌『少女』（光文社）に1956（昭和31）年2月号から12月号まで連載された。



- (10) ひまわり「三太さんっ たら ぼくにお話って いつも そよ風さんの ことばかり なんだもの」
(手塚治虫『そよ風さん』, 手塚治虫漫画全集, 講談社, 1993年12月, p.78)

(10)を見ても分かるとおおり、自称詞は「ぼく」であるにも関わらず、文末表現は典型的な女性語となっている。このキャラクターが“ねじれた役割語”を使用する最初の「ボクっ娘」である。

それから20年後の1970年代に「ボクっ娘」キャラが再び現れる。高橋亮子『つらいぜ! ボクちゃん』*5の主人公、田島望と、手塚治虫『三つ目がとおる』*6の登場人物、和登千代子である。

田島望が少女マンガ、和登千代子が少年マンガで「ボクっ娘」キャラとしてほぼ同時期に登場する。二人も基本的には“ねじれた役割語”を使用している。

*5 『週刊少女コミック』（小学館）、1974（昭和49）年36号～1975（昭和50）年42号連載。

*6 『週刊少年マガジン』（講談社）、1974（昭和49）年7月～1978（昭和53）年3月連載。



- (11) 望「ボクみたいに こんなん でもね」
「やっぱり 意識しちゃうんだもん おも思っ
てることの はんぶんもいなくて ぜんぜ
ん反対のこと いっちゃったり」

（高橋亮子『つらいぜ！ボクちゃん』第2巻，小学館，
1975年9月，p.92）



- (12) 和登「いじめたわけは なんとかして ボク
をおこらせて バンソウコを はが
させようと しむけるため だわ」
上底「その とおりよ あんたは ハキハキ
して いせいが いいわねえ」

（手塚治虫『三つ目がとおる』第8巻，手塚治虫漫画全集，講談社，1980年5月，p.85）

何故、少女マンガと少年マンガという異なるジャンルで同時期に「ボクっ娘」が生み出されたのか。その要因については今後の課題としたいが、これらのキャラクターが契機となってポピュラーカルチャー作品でさまざまな「ボクっ娘」キャラが生み出されるようになったのは事実である。（Appendix も参照のこと）

これらのキャラクターに共通する特徴として、

- (13)a. 男勝り（ときに暴力的）
- b. 活動的／積極的
- c. 短髪／運動が得意

といった点が挙げられよう。おおむね一般的な男性属性を踏襲しているといえる。

2.3. 文学作品における「ボクっ娘」

上に見たように、ポピュラーカルチャー作品では1950年代に「ボクっ娘」キャラが誕生しているが、文学作品においては、（調査の限りでは）戦前に既に「ボクっ娘」キャラが

現れている。横溝正史の小説『蜘蛛と百合』^{*7}に登場する伊馬とり子である。

(14) 俊助「見っともないじゃあないか。 ^{まぶた} 瞼がまっかに ^は 腫れてるぜ。また泣いたんだ
ろう」

伊馬「いいの、泣かしてよ。俊助はそういうけど、少しはぼくの身にもなっ
てよ」

(横溝正史「蜘蛛と百合」(『真珠郎』所収), 扶桑社, 2000年10月, p.228)

伊馬とり子は、ボーイッシュで快活な少女であり、言葉づかいは“ねじれた役割語”となっている。ただし、伊馬は登場後すぐに作品舞台から退場してしまったため、「ボクっ娘」の言葉づかいによってどのような表現効果を狙ったものかははっきりとしないが、当時の女学生間での流行が影響していると考えられる。

ただし、文学作品においては、この作品以外に「ボクっ娘」が(今のところ)見つかっておらず、「ボクっ娘」キャラの波及がどの程度のものであったか窺い知ることはできていない。

3. 役割語的側面からの考察

3.1. 「ぼく」使用女性キャラと「ボクっ娘」キャラは何が違うか

「ボクっ娘」の言葉づかいを役割語として分析する場合、考えなければならない最大の問題は、言葉づかいのねじれ、つまり、文末表現に女性語が現れるのは何故かという点である。

ひまわりさんを例に挙げて説明してみよう。

ひまわりさんは初登場時は「ぼく」使用女性キャラとして描写されていた。蓮っ葉で男勝りな女性として表現されており、言葉づかいはすべて男性語となっている。



(15) ひまわり「ボクが 日由子 だよ よくきて くれた ねえ
まったたぜ ワッハハ ハハ」

(手塚治虫『そよ風さん』, 手塚治虫漫画全集, 講談社, 1993年12月, p.34)

*7 『モダン日本』(モダン日本社)、1936(昭和11)年7月号~8月号掲載。

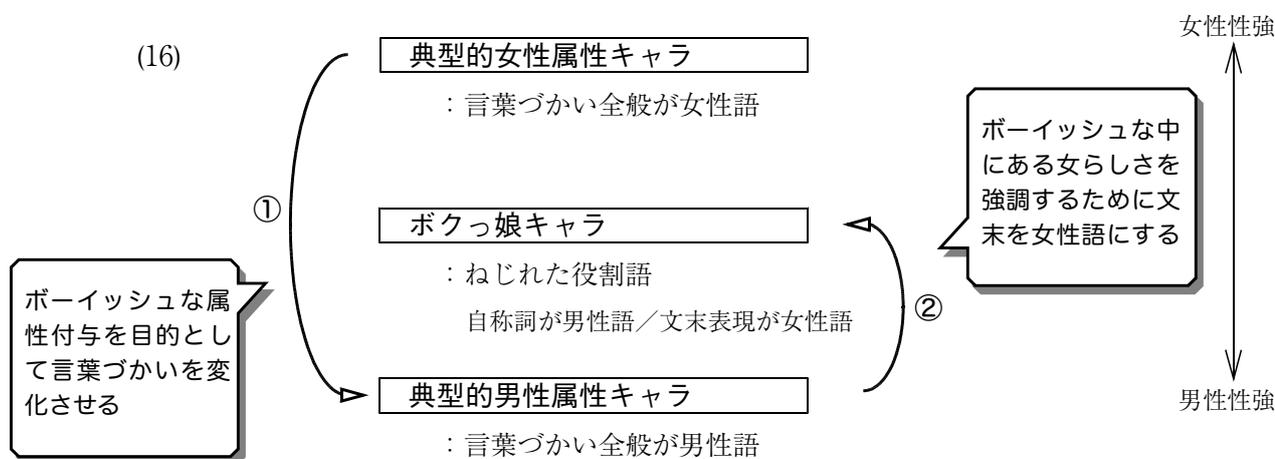
しかし、ある男性に心惹かれるようになってからは、その言葉づかいが変化し、(10)に見られるような“ねじれた役割語”となっていく。そこにあるのは、“女性”としての感情・属性である。

田島望にしても、和登千代子にしても、いずれのキャラクターにも何らかの女性らしさ（田島望は異性に対する恋愛感情、和登千代子は写楽に対するある種の母性愛）が殊更に強調されている。一方、ストーリー展開上、女性らしさを描く必然性がないキャラクター（サファイア等）においては“ねじれた役割語”の使用は見られない。

このことから、「ボクっ娘」キャラは“男っぽさの中にある女らしさ”という二重の属性を表出していると考えることができる。そしてその二重性が“ねじれた役割語”と結びついているのである。逆に、「ぼく」使用女性キャラには二重性はなく、男っぽさという属性のみをキャラクターに上書きしているだけであるといえる。

3.2. “ねじれた役割語”を生み出すメカニズム

上のような分析をもとに、「ボクっ娘」の言葉づかいが生み出されるプロセスを次のように仮定してみたい。



実際の女性使用に見られるような^{ペルソナ}“仮面”“なりきり”ではなく、つまり女性キャラクターに男性自称詞「ぼく」を使わせただけなのではなく、そのキャラクターの男性性を弱めるという目的意識が背後にあると考えられるのである。

「ぼく」使用女性キャラは①のプロセスのみによって生み出される。よって、男性性が強いままであり、属性の二重性は薄い。二重の属性を持つ「ボクっ娘」キャラは①に加え

て②のプロセスも経た結果、生じたものなのである*8。

3.3. 役割語度という考え方の精緻化

(16)のプロセスからは、もう一つの表現が想定できる。自称詞が女性語、文末表現が男性語というパターンである。

(17) わたし／わたくし ～ だぜ。

しかし、このような言葉づかいを使用するキャラクターはなかなか思いつかない。仮に存在したとしても、どのような属性と結びついているか、イメージすることが困難である。何故こちらのパターンは生じないのだろうか*9。

金水(2003)では「役割語度」という概念を仮説的ではあるが提唱している。

(18)「ここで、試みに「役割語度」という概念を導入しておこう。役割語度は、「ある話体（文体）が、特徴的な性質の話し手を想定させる度合い」というような尺度である。…（中略）…常体の書きことばは、いかなる特徴を持った話し手も想定させないという意味で、役割語度0（ゼロ）である。…（中略）…これに対し、私的な話しことばで、没个性的であるが男性、女性の違いが分かれているくらいの話体は、仮に役割語度1としておこう」（pp.67-68）

男性語や女性語は、男性／女性という特徴しか示さないため、役割語度は低い。一方で、「わし～じゃ」「わたくし～だわ」といった、博士語やお嬢様ことばは「博士」「お嬢様」というかなり特徴的なキャラクターを示すことができる。こちらは役割語度が相対的に高いといえる。

役割語度はキャラクターと言語表現との結びつきにおいて考え出された概念であるが、

*8 近年のポピュラーカルチャー作品においては、①のプロセスのみの「ほく」使用女性キャラが大半を占め、狭義の「ボクっ娘」キャラはほとんど見られない（Appendix 参照）。その要因はさまざま考えられるが、“萌え要素”の付加に焦点を当てた場合、①のプロセスで十分それをクリアしてしまうためではないだろうか。属性描写よりも萌え要素付加を優先した結果であると思われる。

*9 役割語というレベル以前に、「わたし」＝丁寧、「～だぜ」＝ぞんざい、という相反が関わっているとも考えられる。

「ボクっ娘」キャラのような“ねじれた役割語”の存在を踏まえると、同じ男性語なら男性語、女性語なら女性語の中でも、役割語度の強弱に寄与する度合いが異なるのではないかという予測が成り立つ。

(19)A キャラクター（属性） \longleftrightarrow 一括りの言語表現

B キャラクター（属性） \longleftrightarrow 言語表現 α
 \longleftrightarrow 言語表現 β
 \dashrightarrow 言語表現 γ

（線の太細は結びつきの強弱を示す）

役割語度という観点では、言語表現は一括りにされ、キャラクターとの結びつきの強弱のほうに焦点が当てられる（(19)A）。一括りの言語表現とキャラクターとの結びつきが強いほど役割語度が高くなる。つまり、「わし」も「～じゃ」も「博士」というキャラクターに等しく結びついているものとして捉えられている。

しかし、「ボクっ娘」キャラの言葉づかひのメカニズムを考えた場合、(19)Bのように、同種の役割語の中でも優先順位に差がある可能性がある。女性らしさを強調させるために（つまり②のプロセスにおいて）、文末表現のほうが変化するということは、文末表現のほうがキャラクターの特徴・属性とより強く結びついていると考えられないだろうか。

(20) 言葉づかひがある役割と結びつく場合の優先順位

文末表現 \geq 自称詞

従来の役割語研究は、キャラクター（ステレオタイプ）の抽出や個々の言語表現の分析が中心であった。「ボクっ娘」キャラのねじれた言葉づかひは、自称詞と文末表現とに役割語としての優先度、重要度、価値付けの差があるということを指摘するものである。このような差異は、今後の役割語分析への一助となるのではないかと思われる。

4. おわりに

本発表での考察結果を以下にまとめる。

- (21) “ねじれた役割語”を使用する「ボクっ娘」キャラは1950年代に発生した。
- (22) 「ボクっ娘」キャラは、単なる男勝りな性格ではなく、ある面で女性らしさを持つ。したがって、“ねじれた役割語”は、ボーイッシュ・女性らしさという二重の属性を表出するために作り出されたと考えられる。
- (23) 役割語においては、文末表現のほうが役割と結びつく度合いが強い。

問題は山積しているが、いくつか今後の課題となるものを列挙しておく。

- (24) 用例のさらなる収集
- (25) ①から②への変化の妥当性の検証
 - 本発表に対する反例がいくつかある。例えば、ゲーム『東方 project』の登場人物、霧雨魔理沙は「わたし～だぜ」という言葉づかいをする。また、いわゆる不良少女キャラの「あたい～だぜ」といった言葉づかいも反例となり得る。
- (26) 「オレ女」「男の娘」などの言葉づかいとの関連性
- (27) 多重役割語の制約との関連性
 - 例えば、博士語とお嬢様ことばは同時に使用することができない（「わし～だわ」等）。たとえ両方の属性を持っていたとしても、言葉づかいはどちらかに固定される。「ボクっ娘」はその意味では言葉づかいが固定されていないともいえる。この違いを生む要因は何であろうか。

参考文献

- 岡本成子(2010) 「若い女性の「男ことば」 ―言葉づかいとアイデンティティ」, 中村桃子(編)『ジェンダーで学ぶ言語学』, pp.129-144, 世界思想社.
- 尾崎喜光(1997) 「女性専用の文末形式のいま」, 現代日本語研究会(編)『女性のことば・職場編』, pp.33-58, ひつじ書房.
- 川瀬卓(2010) 「キャラ語尾「です」の特徴と位置付け」, 『文献探究』 48, pp.1-14, 文献探究の会.
- 金水敏(2000) 「役割語探求の提案」, 佐藤喜代治(編)『国語論究第8集 国語史の新視点』, pp.311-351, 明治書院.
- 金水敏(2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』 岩波書店.
- 金水敏(2008) 「役割語と日本語史」, 金水・乾・渋谷『シリーズ日本語史4 日本語史のインタフェース』, pp.205-236, 岩波書店.
- 金水敏(2010a) 「「男ことば」の歴史」, 中村桃子(編)『ジェンダーで学ぶ言語学』, pp.35-49, 世界思想社.
- 金水敏(2010b) 「現代日本語の「役割語」 ―ステレオタイプ的話体の研究―」, 南雅彦(編)『言語学と日本語教育VI』, pp.1-7, くろしお出版.
- 小林千草(2001) 「女性のことば今昔 ―「ちげーよ」と「よくってよ」」『國文學』 Vol.46, No.12, pp.34-41, 學燈社.
- 小松寿男(1998) 「キミとボク ―江戸東京語における対使用を中心に―」, 国語研究論集編集委員会(編)『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』, pp.667-685, 汲古書院.
- 定延利之(2007) 「キャラ助詞が現れる環境」, 金水敏(編)『役割語研究の地平』, pp.27-48, くろしお出版.
- 定延利之(2011) 『日本語社会のぞきキャラくり』 三省堂.
- 寿岳章子(1979) 『日本語と女』 岩波新書.
- 富樫純一(2011) 「ツンデレ属性における言語表現の特徴 ―ツンデレ表現ケーススタディー―」, 金水敏(編)『役割語研究の展開』, pp.279-295, くろしお出版.
- 中村純子(2000) 「終助詞における男性語と女性語」『信州大学留学生センター紀要』 1, pp.1-11, 信州大学留学生センター.
- 西田隆政(2009) 「ツンデレ表現の待遇性 ―接続助詞カラによる「言いさし」の表現を中心に―」, 『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』 45, pp.15-23, 甲南女子大学.
- 西田隆政(2010) 「「属性表現」をめぐって ―ツンデレ表現と役割語の相違点を中心に―」『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』 46, pp.1-11, 甲南女子大学.
- 西田隆政(2011a) 「役割語としてのツンデレ表現 ―「常用性」の有無に着目して―」, 金水敏(編)『役割語研究の展開』, pp.265-278, くろしお出版.
- 西田隆政(2011b) 「「ボク少女」の言語表現 ―常用性のある「属性表現」―」, 公開シンポジウム「役割語・発話キャラクタ研究の展開」(2011/02/06)発表資料.

Appendix : 広義「ボクっ娘」実例集 (抄)

◆来生愛 (『キャッツ♡アイ』)



(28) 瞳「このままだと 変に思われちゃうし…」

愛「いっそ ボクたちが キャッツだ…って ^{としお}俊夫さんに いえたらねえ」

(北条司『キャッツ♡アイ』第12巻, 集英社, 1985年1月, p.134)

→来生三姉妹の三女。連載初期は「わたし」を使用する普通の女性キャラだったが、途中から突如「ボクっ娘」キャラに変わる。キャラをはっきり立たせるためか。また、明確な女性語を使用しておらず、中性的な言葉づかいであるので、「ぼく」使用女性キャラと位置付けられる。

◆大空ひばり (『ストップ!!ひばりくん!』)



(29) ひばり「耕作のやつ デレーっとして!!」

「ぼくとゆうものがありながら~~~~~」

(江口寿史『ストップ!!ひばりくん! コンプリート・エディション』第1巻, 小学館, 2009年7月, p.143 ※初出は1982年1月)

→いわゆるニューハーフキャラの先駆けである。ニューハーフやオカマキャラは、典型的な女性語を過剰に用いるのが通常であるが、大空ひばりに関しては自称詞が「ぼく」となっている。本発表と同様のメカニズムで説明できるか。

→また、近年のポピュラーカルチャー作品に見られるようになった「男の娘」キャラの元祖でもある。

◆国広一 (『咲 -saki-』)



(30) 一「ボクの親リーが 怖くないほどの 打点と待ちなのか…?」

(小林立『咲 -saki-』第3巻, スクウェア・エニックス, 2007年12月, p.187)

→ここ最近のポピュラーカルチャー作品においては、国広一のように、言葉づかい全般が男性語になっている「ぼく」使用女性キャラのほうが多く見受けられ、本発表で言うところの狭義「ボクっ娘」キャラはあまり目にしない。

◆工藤愛子（『バカとテストと召喚獣』）



(31) 愛子「ボク？ ボクは^{すいえいぶ}水泳部 だから」

（作・井上堅二／画・まったくモー助、夢唄『バカとテストと召喚獣』第6巻、
角川書店、2012年1月、p.64）

→工藤愛子のような、いわゆる脇役キャラに「ぼく」使用女性キャラが現れやすい。近年のポピュラーカルチャー作品は登場人物が多く、一人一人のキャラを際立たせるためには、言葉づかいの変化がもっとも手っ取り早いからか。

◆フリーザ最終形態（『ドラゴンボール』）



(32) フリーザ「^{スーパー}超サイヤ人^{じん}だなんて つまらない ^{でんせつ}ただの伝説に
いつまでも こだわってるからさ」

「ボクは くだいやツが キライなんだ」

（鳥山明『ドラゴンボール完全版』第21巻、集英社、2003年10月、p.117）

→女性キャラクターではないが、フリーザは最終形態（つまりもっとも強い状態）になると自称詞が「ぼく」に変化する。もっとも強いという属性であるにも関わらず、“柔弱”なイメージと結びつく「ぼく」を使用することにどのような意味があるのだろうか。「ボクっ娘」と同様のメカニズムで説明することは果たして可能か。

……他にも数え切れないほどの、広義「ボクっ娘」キャラが存在する。